朝鮮半島出土古人骨の時代的特徴

小片　丘彦

鹿児島大学歯学部口腔解剖学講座Ⅱ

Ⅰ．はじめに

短頭，高頭，蒙古ヒダ，扁平な顔。現在，朝鮮半島に居住する人々に広く見られるこのような身体形質は，いつ頃から備わるようになったのであろうか。中国や日本など，周辺地域の人々の中にも程度の差はあれ，同じような特徴をもつ人が散見される。近隣の人々とよく似ているのは当然のこととも言えるが，その類似性がどの程度，人的な結びつきの深さを表すのであろうか。身長や頭形などは，同じ半島の中でも，南北の地域差が指摘されている。こうした身体形質に関する問題を解き明かしていくことは，民族の起源を探ることにもつながる。

当講座は，釜山大学校博物館と国立晋州博物館の協力により，慶尚南道出土の古人骨に関する研究を継続してきた。1976年から現在まで，携わった遺跡は10カ所ほどになるが，検出された個体数が多かった3遺跡の人骨について，これまでの分析結果をまとめてみたい。

Ⅱ．煙台島・勒島・礼安里遺跡 ― 慶尚南道の古人骨分析

半島南部の沿岸地域に点在する島々には，新石器時代の貝塚遺跡が数多く存在し，近年，盛んに考古学的調査が実施されている。豊富な水産資源の利用が，この地に居住した先史人の生業の中心になっていたことは，立地条件からも容易に推測できる。また，朝鮮半島と日本との交流において，この海域が要衝の地であったことも想像に難くない。とりわけ，漁撈活動を通じての交渉が重要な役割を果たしたことが，出土遺物によって明らかにされている。

1．煙台島人骨（図1）

煙台島は南海岸の島嶼地域に点在する小島で，慶尚南道統営郡に属す。煙台島煙谷里では，国立晋州博物館が1988年から4次にわたって貝塚遺跡の調査を行い，土壙墓から15体の埋葬人骨と少数の散在人骨を検出した。所属年代は前4,000年紀の新石器時代前期である。遺跡を覆う礫と土質の影響で，保存不良な個体が多く，計測ができた部分はごく限られたが，いくつかの興味深い所見が得られている。

煙台島人の頭蓋冠は全体に厚く，頑丈である。咬合様式は，前歯部が確認できた6例すべてが鉗子状である。ある程度まとまった計測が可能であった頭蓋は5号女性だけで，最大長と最大幅がともに大きく，長幅示数は79.0と中頭型の上限に近い。顔面部はほとんど復元できず，眼窩高やオトガイ高が比較的大きいことを確認しただけにとどまっている。体肢骨についても出土数の割には断片的で，多くの情報は得られていない。最も保存のよかった1号（男性）は，上腕骨と脛骨の扁平性，大腿骨の柱状性，尺骨や腓骨骨幹の特異な断面形状，明瞭な膝蓋骨切痕などの特徴を示した。1号以外では，体肢骨幹の扁平性や柱状性の強さにばらつきがあり，特に女性と判定された人骨にはきゃしゃな個体が多く含まれる。推定身長が算出できたのは男性2例（1号：167cm，10号：161cm）である。

煙台島貝塚人の特徴的な所見として，外耳道骨腫と下顎隆起の頻度の高さがあげられる。埋葬遺構から出土した人骨だけに限ると，外耳道壁の状態が観察できた6頭蓋9側のうち，5頭蓋7側に骨腫が確認された。さらに散在人骨のなかから，2側に骨腫が見つかっている。なお，近隣の欲知島人にも強度の骨腫が認められており，半島南部の島嶼地域は骨腫の多発地帯であっ

本稿は，下記の論考の主として後半を再録したものである。
小片丘彦，金　鎭晶，峰　和治，竹中正巳：朝鮮半島先史・古代人骨の時代的特徴．青丘学術論集，10，5-43，1997

た可能性が高い。その成因については，遺伝的な素因に加え，外耳道への冷水刺激が関係しているとの見方が一般的である。当遺跡での頻度の高さは，漁撈や潜水などの生業と関連した現象と考えられる。出土貝類の分析が進めば，その採取に潜水漁法が行われていたかどうかも分かってくるであろう。

下顎隆起は9頭蓋13側のうち，7頭蓋10側に観察された。外耳道骨腫と同様，遺伝要因と環境要因が合わさって生じるとする説と，どちらか一方を重視する説とがある。環境要因としては，臼歯部にかかる過剰な

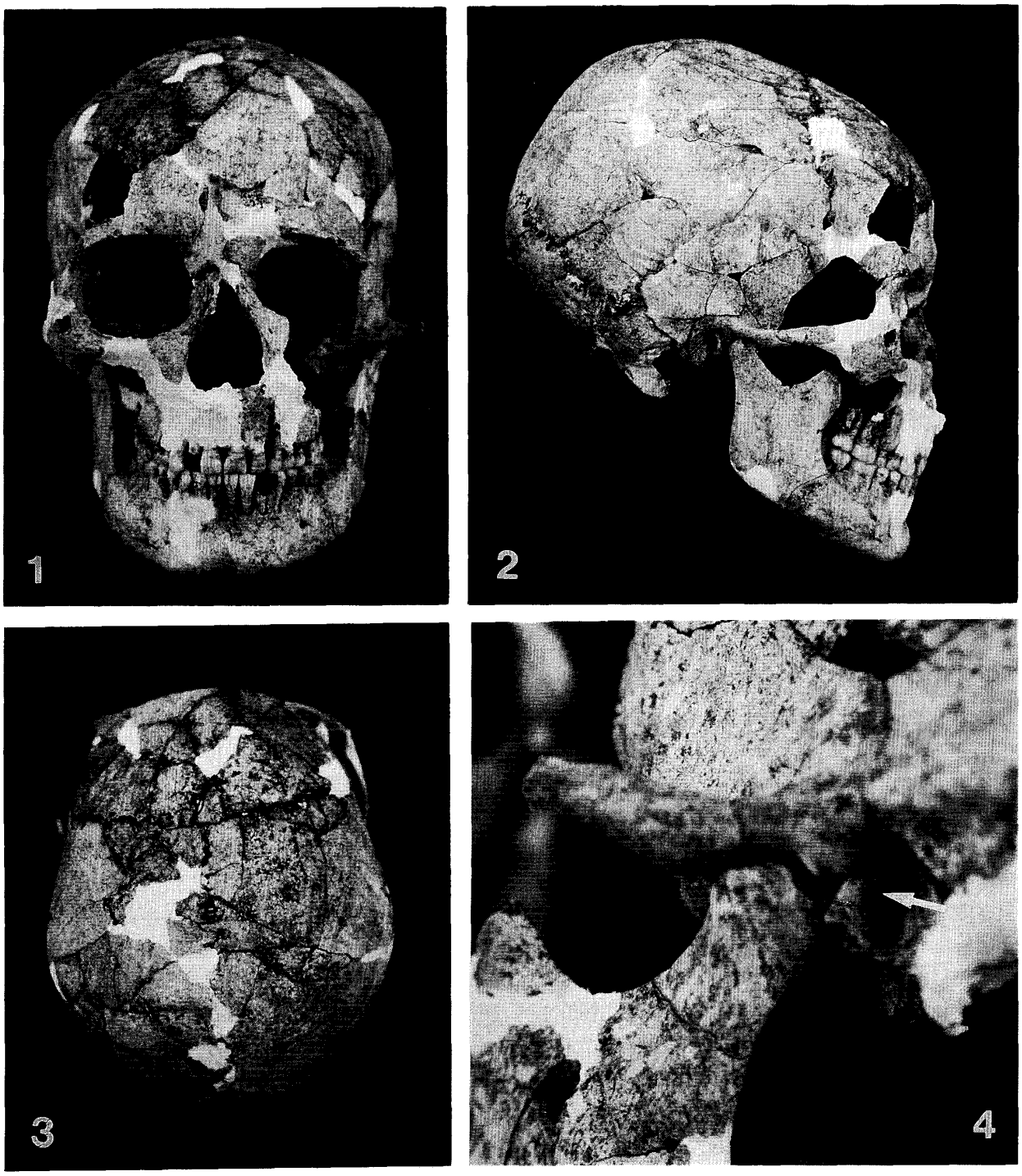

図1　煙台島遺跡出土人骨　5号女性
1．前面　　2．右側面
3．上面　　4．外耳道骨腫（左）

咬合圧をあげる研究者が多いが，煙台島人の咬耗度は，特に目立つほど強いとも言えない。

周辺地域の同時代資料としては，日本の縄文時代人骨の研究が進んでいる。山口（Yamaguchi）[1] は縄文人骨に共通する形態特徴として，長さと幅が大きく高さがやや低い脳頭蓋，眉間と鼻骨の隆起，低顔性，鉗子状咬合，長い鎖骨，上腕骨の扁平性，尺骨骨幹横断面の特異な形，大腿骨の柱状性，脛骨骨幹の扁平性，腓骨外側面の縦溝，体肢骨遠位部の相対的な長さ，といった事項をあげている。煙台島人は，個体ごとに差はあるものの，これらの特徴と多くの点で一致する。小片 保[2] は縄文人の時代的特徴を，早期人は「きゃしゃ」，中後晩期人を「頑丈」と端的に表現したが，池田[3] は海岸部や山岳部，平野部といった遺跡の立地条件が人骨の形態に与える影響の大きさを指摘している。煙台島では，女性にきゃしゃな個体があるが，歯の異常な摩耗や極端に繊細な体肢骨，低身長といった縄文早期人的な特徴を示す個体は含まれていない。保存のよかった1号（男性）は身長が高く，極めて頑強であり，体肢の骨幹は強い扁平性や柱状性を示し，縄文後晩期の貝塚人的特徴をもつ。このような形質の共通性は，煙台島の立地からくる生態学的条件，特に摂取する栄養や生業形態の類似によってもたらされたと解釈することも可能であろう。縄文後晩期の人骨と中国の新石器時代人を計測値で比較すると，華北よりも華南のグループに比較的近い[4]。煙台島資料も，華南の新石器時代人により近いと予想されるが，計測値による詳細な比較が今後の課題である。

2．勒島人骨（図2）

勒島は，慶尚南道三千浦市の沖合に浮かぶ長径1km足らずの小島である。島全体がひとつの巨大な遺跡であることはかなり以前から知られていたが，1985～86年の2回にわたり，釜山大学校博物館が4地区で考古学的調査を実施し，無文土器時代後期の貝塚や住居址を検出している。島の南東部に位置する海岸沿いの斜面（Ic地区）からは，73基にのぼる墓が見つかり，多数の人骨が出土した。所属年代は伴出遺物などから紀元前1世紀代とみられる。埋葬遺構は，土壙墓と甕棺墓が相半ばしており，石棺墓も1基だけ検出されている。甕棺墓には，すべて乳・幼児が納められていた。このほかに，土壙墓に葬られた幼・小児もあり，全被葬者の約80％は未成人者が占めている。Ic地区の土質そのものは，人骨遺存に適しているとは言えず，かなり骨の腐蝕が進んだ土壙墓もあるが，墓域の上に薄く形成された貝層に加え，遺体周囲に多数の動物骨が存在した墓では，人骨の保存状態は良好であった。

これまでに復元の終わった成人頭蓋は男性5例，女性6例である。破損によって計測できない頭蓋もあるが，主要計測値から概観してみると，脳頭蓋は男女と

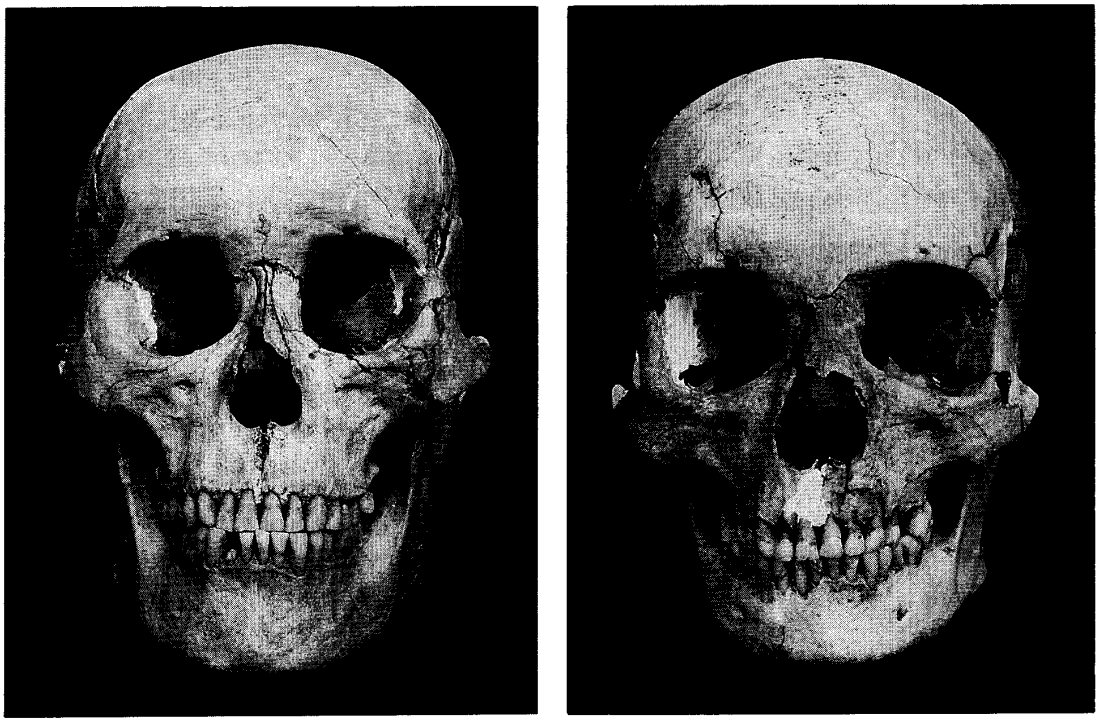

図2　勒島遺跡出土人骨　47号男性（左），67号女性（右）

も前後的に長く，長幅示数は長頭の上限（男：74.4，女：74.9）にある。バジオン・ブレグマ高は現代朝鮮人に比べ，かなり低い。男性の上顔高は72.0㎜と比較的高いが，女性は65㎜とやや低い。外耳道骨腫は14例中，1例に軽度のものが認められた。下顎隆起は14例中，9例（弱6例，中3例）と頻度が高い。大腿骨最大長からPearson式によって推定身長を求めてみると，平均は男性160㎝（5例），女性147㎝（7例）である。男性では165㎝を超えるものが2例，160㎝未満が3例で，高身長と低身長が混在している。女性の最高は153㎝だが，他の6例は150㎝未満で，全体的には低身長と言える。

特記所見として，女性2体（31号,35号）にいわゆる風習的抜歯が確認された（図3）。上下顎の歯列が観察できたのは成人14例で，抜歯施行率は14％である。健全な歯を人為的に抜去する風習は先史時代から世界各地に分布しており，今世紀までその習俗を保持し続けた種族も知られている。非常な苦痛を伴うこの特異な風習がどのような目的で施されたのか，直接古人骨から回答を得ることは難しいが，古文献や民族学的調査から婚姻，成人，服喪，身分表示など，さまざまな動機や意味付けをもつことが知られている。これまで抜歯の疑いがもたれた朝鮮半島の事例は，楽浪王光墓の女性骨（上顎左側中切歯と下顎左右側中切歯）と礼安里87号墳男性骨（上顎右側側切歯）がある。しかし，いずれの報告者も抜歯とは断定していない。勒島の場合，2例が同じ部位の欠損であること，対象が左右側の犬歯であることから，風習的抜歯と判断してもよいであろう。

朝鮮半島の周辺地域の抜歯を概観してみると，中国には山東省から華南にかけての広い範囲に，上顎左右の側切歯を抜去する様式が分布する。その起源は新石器時代にさかのぼる。日本では縄文後期から弥生中期にかけて盛行し，各様式の消長が地域別に言及されるまでに至っている。これまで，朝鮮半島から明確な抜歯例が見つかっていなかったのは，古人骨の出土そのものが少ないことに原因があると思われ，今後，勒島に続いて抜歯人骨が出土する可能性は高い。本例のような上顎両側犬歯の抜去という様式が広く普及していたのか，あるいは他の様式が混在していたのかという点は，注目される問題である。上顎両側犬歯を抜去する様式は，日本の弥生中期には衰退し，西北九州の沿岸・島嶼地域に残るだけとなっていた。これは，半島南端と西北九州との密接な関係を示唆している。しかし，勒島遺跡からは，北部九州との交流を示す城ノ越式と須玖Ⅰ式の特徴を示す弥生系土器も出土している。当時，朝鮮半島と九州の間では，広範囲の交渉が行われていたのであろう。

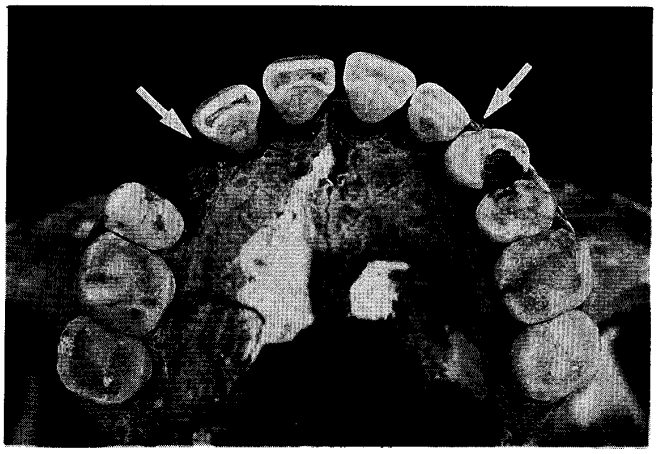

図3　勒島35号女性の風習的抜歯（上顎左右犬歯：矢印）右側の第1小臼歯は死後脱落している

九州北半の弥生人は形質的に，渡来系の北部九州・山口弥生人と在来（縄文）系の西北九州弥生人に大別される。勒島人骨は，はたしてどちらの弥生人により類似しているのだろうか。渡来系弥生人の最大の特徴は，高顔・高身長と言われる。上顔高と推定身長を勒島人，北部九州弥生人および西北九州弥生人の間で比較してみると，おおむね勒島人は両弥生人の中間にくる。また，鼻根部の扁平性も渡来的要素を表していると言われるが，勒島人の場合は概して扁平であり，鼻骨も縄文人のような特徴的湾曲を形成していない。このように勒島人は，北部九州の渡来系弥生人とも，西北九州の在来系弥生人とも形質的に違いが見られる。同じ渡来系でも，北部九州平野部の弥生人よりは，山口県の土井ヶ浜弥生人に幾分近い。それでも，土井ヶ浜人と勒島人の計測値の差は大きい。勒島人は，鼻根部の扁平性のように，いわゆる渡来的要素も備えているが，島嶼部という遺跡の立地条件は，在来系弥生人の出土地に類似している。抜歯風習と弥生系土器とでは，交流の対象地域について異なる見解が導かれる。人骨の類似の度合いが項目によって一定しないのも，海域を共有した半島南部と九州北部の人々の交渉範囲が広く，体質的な影響の及ぼし方も双方向であったと考えれば，格別不思議な事柄とは思われない。

3．礼安里人骨（図4）

釜山市の近郊に位置する金海礼安里古墳群は，4～7世紀に築かれた伽耶人の集団墓地である。墓域は，馬山と呼ばれる海抜約60ｍの小高い山から西方に伸び

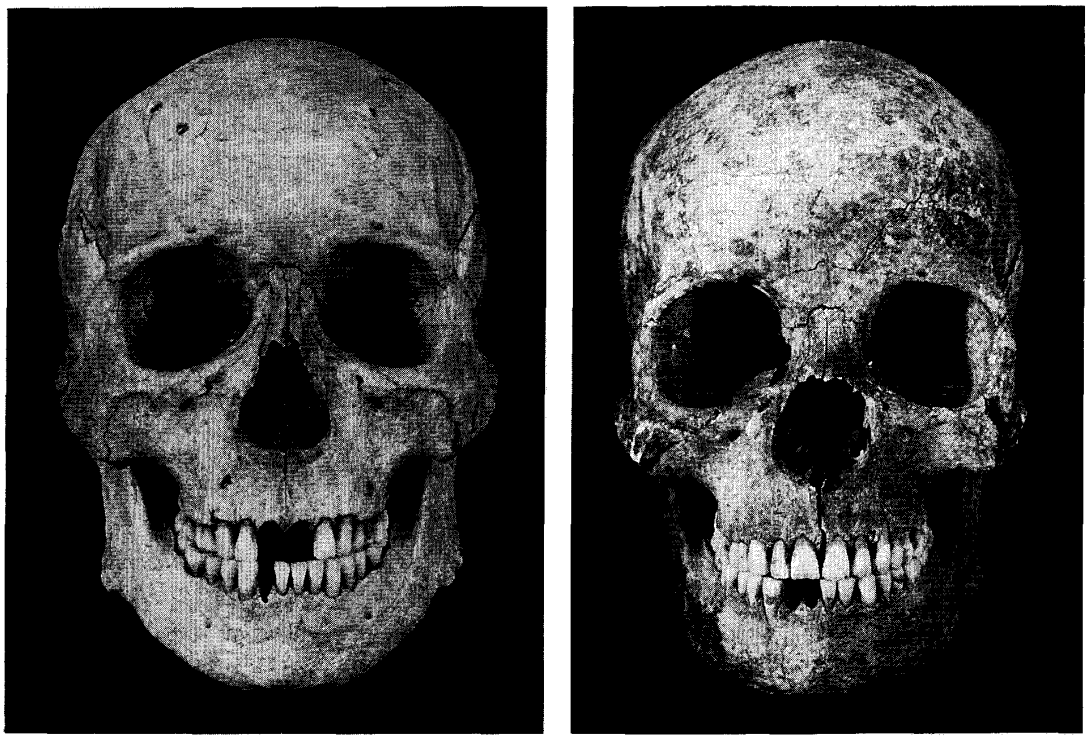

図4　礼安里遺跡出土人骨　77号A男性（左），129号女性（右）

る低丘陵地に広がっており，各種の墓が密集して造営されていた。1976年，最初の学術調査が国立中央博物館によって行われたが，その後を受け継いだ釜山大学校博物館が1980年までに4次にわたる発掘調査を実施している。本遺跡は洛東江の河口平野にあって，土壌は砂質である。墓域の上には，この地に住み着いた人々が採食した貝殻が散在し，一部の墓壙は貝層に掘り込まれていたので，人骨の保存には好条件が揃っていた。

礼安里古墳群は，三国時代の伽耶地域における墓制変化と遺物編年を確立するうえで重要な役割をはたした遺跡である。検出された埋葬遺構は182基を数え，墓相互の重複関係 から，木槨墓・石棺系石槨墓→竪穴式長方形石槨墓→横口式方形石室墓へと墓制が変化していったことが確認されている。

礼安里古墳群は，その規模や副葬品の性質からみて被支配階層の墓域と考えられる。100号，104号墳のように副壙をもつ木槨墓や，鉄製の冑を副葬した150号墳など，身分や財力に多少の差はあったようであるが，被葬者の大部分は在地の庶民層とみなされる。

確認された人骨は総計210体である。礼安里遺跡を年代順に3期に分けると，木槨墓を中心とする前期（4世紀代）から56体，竪穴式石槨墓を中心とする中期（5世紀～6世紀中葉）から86体，方形石室墓を中心とする後期（6世紀後葉～7世紀前葉）から65体が出土している。木槨墓や石槨墓は基本的に単体埋葬であり，同一墓壙への2体同時埋葬と考えられるのは，77号墳の壮年男性と小児（6歳）の組合わせ1例だけであった。方形石室墓には追葬が行われており，17号墳や30号墳のように10体を上回る例もある。また，追葬の際に集骨されているため，方形石室墓では原埋葬の位置を保っていた個体は少ない。出土人骨の男女比はおよそ5：6で，やや女性の方が多く，特に壮年期の女性死亡者の多さが目につく。年齢別では，未成人の割合が全体の28.1％を占める。ただし，一般に未成人個体の骨は検出率が低くなる傾向にあるので，実際の未成人死亡の割合はさらに高かったものと考えられる。

頭蓋および四肢骨の計測結果を総合すると，礼安里人の特徴は次のようにまとめられる。

①脳頭蓋の長幅・長高・幅高示数は男女とも中頭・中頭・中頭型に属す。
②頭高がやや低い。
③顔面部は高顔・高眼窩・狭鼻傾向を示す。
④鼻根部が著しく扁平である。
⑤上腕骨および脛骨の扁平性や大腿骨の柱状性は認められない。
⑥上腕に対する前腕，大腿に対する下腿の相対的な長さが短い。

⑦推定身長の平均値は男性164.7cm，女性150.8cmと高身長である（Pearson式）。

礼安里人は，眼窩の高さと鼻根部の扁平性が際立っている。また，現代朝鮮人との間にも，頭高をはじめ，かなり多くの相違点がある。朝島人や貞柏里楽浪古墳人とは顔面の高径が大きい点では類似するが，脳頭蓋の高さに大きな差が存在する。そこで，頭蓋計測値9項目（Martin's No.:1, 8, 17, 45, 48, 51, 52, 54, 55）を用いて礼安里人と比較諸集団とのPenrose形態距離を算出してみた。この距離が小さいほど形態的に似ているとみなされるが，男性では，咸北新石器人に最も近いが，朝島人は大きく離れ，現代朝鮮人からの距離も大きい。日本資料のうちでは，北部九州・山口の弥生，古墳人に近く，縄文人や在来系と言われる西北九州弥生人との距離が大きい点は注目される。同じ9項目の計測値をもとに主成分分析を行い，周辺地域の古代から現代に至る代表的集団を2次元展開図にプロットしてみると，相互の位置関係が一層明瞭となる（図5）。女性については省略するが，男性とほぼ同様の位置関係が認められる。さらに，頭蓋非計測的小変異によるSmith距離，顔面平坦度，体肢骨の長さ，体肢近・遠位部の長径比，推定身長のいずれをとってみても，礼安里人は北部九州・山口地方の弥生，古墳人集団に近いという結果が得られる。

Ⅲ．現代人骨

現代人骨格のデータは，現代人の地域差研究に有用なだけではなく，古人骨の比較資料としても貴重である。朝鮮半島の現代人骨に関する研究としては，解放前に京城帝大や京城医専の解剖学教室が残した業績が現在でも頻繁に利用されている。頭蓋については，島[5),6)]の頭蓋計測と大西[7)]の非計測的小変異の観察が，朝鮮半島人を代表するデータとされている。島よりも早く，小金井，長谷部，Satake（佐竹）らが頭蓋計測値を発表しており，資料数はやや少なかったものの，朝鮮半島人が東アジアの中でも著しい短頭・高頭性を示すことが既に述べられている。1931年にUweda（上田）[8)]が発表したソウルの龍山古墓人骨は，

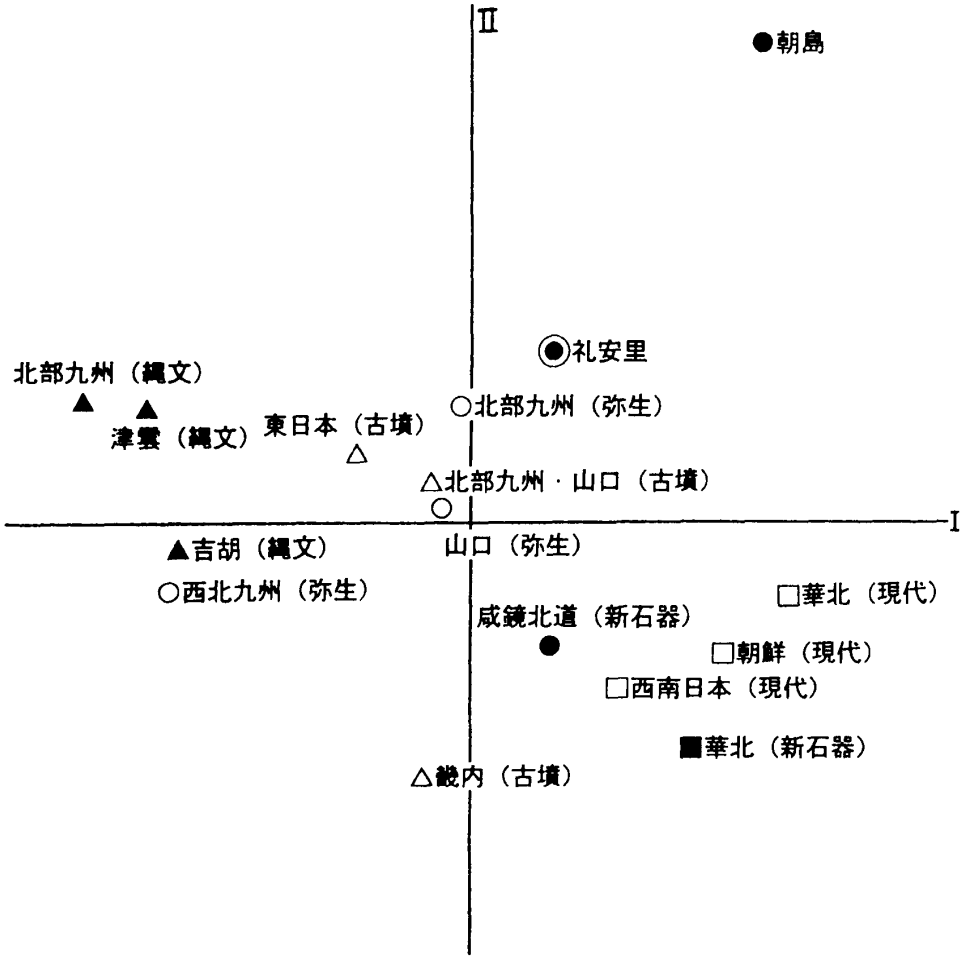

図5　頭蓋計測値9項目による主成分分析（男性）

近世に属すものが多数含まれるが，男女とも100例を超える大資料である。龍山人骨も短頭・高頭性を示しているが，島の京畿道現代人よりその度合いは弱い。この差はわずかなものだが，近世から現代への変化を表しているのかも知れない。

近年，Takenaka（竹中）[9] は慶尚南道出身の現代人頭蓋を分析し，短頭・高頭性のほかに，高顔性や前頭部と頬上顎部の平坦性といった特徴を見いだしている。また，頭蓋計測と頭蓋形態小変異からは，近隣地域の現代人や古人骨集団の中で，慶尚南道現代人は島の京畿道現代人に最も類似性が高いという。同じ慶尚南道の礼安里古墳群人骨との比較では，頭形が中頭でバジオン・ブレグマ高の低い礼安里人とは異なる。また，鼻骨の平坦示数は現代人のほうが大きい値を示し，平坦性が弱い。しかし，顔面部の総体的な高さや前頭部と鼻部の平坦性および頭蓋形態小変異の出現頻度には両者に差が見られない。礼安里人と慶尚南道現代人とに共通しているこうした特徴は，日本の渡来系弥生人や古墳人にも見られ，大陸的要素として礼安里の時代以降，現代にまで継承されてきたと考えられる。

小浜[10] らの行った生体計測による研究から，朝鮮半島現代人の短頭・高頭性は，南部と北部でその傾向が強く，中部でやや弱いという。また身長は，北に高く南に低いという，地理的勾配が指摘されている。現代人の骨格では，今のところこうした地域差の存在は明確にされていない。今後は，半島各地の現代人骨を調査し，地域差や地理的勾配の有無を検討しなければならない。

Ⅳ．日本における「渡来人」問題

金関丈夫は，日本の弥生時代を中心に起こった形質変化の主因を，朝鮮半島からの渡来集団との混血に求める，いわゆる「渡来説」を提唱した[11]。北部九州・山口地方の遺跡から出土する弥生人骨は，縄文人骨をはるかにしのぐ高顔・高身長を示す。その主因として縄文時代から弥生時代への移行期に，朝鮮半島から稲作や金属器などの文化要素とともに，人的な渡来があったと想定したのである。金関がこの説を発表した当時，渡来の原郷と目された半島南部にさしたる古人骨は知られていなかった。従って金関の渡来説には，朝鮮南部において「古代から現代にいたるあいだに，もし住民の身長に変化がなかったとすれば」とのただし書きがつけられていた。渡来説の検証には，朝鮮半島からの弥生時代相当期あるいはそれ以前の古人骨資料が不可欠である。その報告例はいまだに少ないが，黄石里支石墓人や朝島貝塚人は金関が期待したような高顔・高身長という特徴を備えていた。年代的にはやや降る資料であるが，礼安里人が北部九州・山口弥生人と形質的な近縁性が高いという結果は，間接的に金関説を支持することになるであろう。金関が「渡来説」を提唱するうえで用いたいくつかの仮定が，人骨データの裏づけによってより現実味を増してきたことは確かである。朝鮮半島の先史・古代人骨が全般に高身長であり，また，朝島人や礼安里人の高顔性を考え合わせると，渡来系弥生人の形質特徴としてあげられる高顔・高身長の由来は朝鮮半島に求めるのが，今のところ最も妥当な考え方であろう。

金関の渡来説は，大筋において承認されたと言ってよいが，福岡県新町遺跡の弥生初頭期人骨[12] が縄文人的形質を示したことで，渡来人の系統や到着地について，新たな疑問も投げかけられている。例えば，稲作伝来の起点と考えられる中国江南地方から，低顔・低身長の人々が日本に渡ってきた可能性である。東シナ海・黄海ルートの渡来がはたしてあったのかどうか。もしそうであれば，朝鮮半島にもその痕跡が残ってはいないのか。古人骨からみた日本への渡来の問題も，この点が今後の焦点になりそうである。

Ⅴ．朝鮮半島住民の源流

そこでさらに，朝鮮半島人の源流はどこへたどれるのか，というのが次の問題である。これを頭部の二，三の形質に着目して考えてみたい。

先史東アジア人の顔形については，山口 敏[13] が描いた上顔高分布図が示唆的である。これは男性の上顔高70㎜を境に顔の高さを２群に分けたものだが，アジア大陸北半には高顔型が広がり，華南と縄文時代の日本には低顔型が分布している。朝鮮半島先史人の顔形には幾分かのばらつきはあるものの，礼安里人，勒島人，朝島人をはじめとして70㎜を超える例が多く，大陸北半に広がる高顔域に連なる可能性が高いように思われる。また，シベリア一帯に住む北方モンゴロイドの特徴として，寒冷な気候に適応した扁平な顔があげられる。渡来系弥生人の顔面平坦度は，きわめて扁平な顔をもつアムール川流域の集団に匹敵する値を示す。礼安里人もまたこれに近い。

ここで少し比較集団の範囲を中国やシベリアにも広げて，頭蓋計測値をもとにクラスター分析を行い，樹形図を描いてみた（図６）。まず，縄文人と華南新石器時代人が一群となって分かれる。次に，各地域の現代人と華北新石器時代人を含む第２のクラスターと，

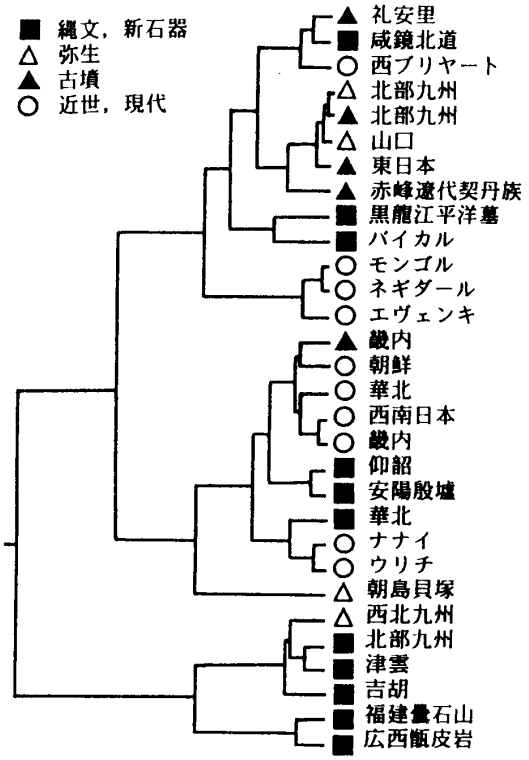

図6　形態距離のクラスター分析による樹形図（男性）

日本の渡来系弥生人，古墳人，中国東北部およびシベリア集団を含む第3のクラスターが分かれる。礼安里人は咸鏡北道新石器人とともに最後のクラスターに属している。シベリア集団のばらつきを見ると，この結果が必ずしも安定したものとは言いきれないが，少なくとも北方アジア人と礼安里人や咸北新石器時代人との関係の深さは読み取れる。現代朝鮮人は，日本や華北の現代人とともに第2のクラスターに属すが，華北の新石器時代人とも比較的近い関係にある。現代朝鮮人の頭蓋形態は礼安里人や勒島人と大きく異なるが，これは日本や中国の現代人とともに，華北の影響が及んでいるからとも考えられる。

朝鮮半島住民には，先史・古代においては北方アジア的な要素が多々見られるが，島嶼部人骨のように，日本の貝塚縄文人に共通するような特徴を見ることもある。また朝鮮半島の現代人には，華北からの影響も考えられる。

Ⅵ．おわりに

煙台島・勒島・礼安里遺跡人骨を中心に形質所見を述べてきたが，この3遺跡は，いずれも韓国南端に偏在しており，その所見をもって往時，朝鮮半島に生を営んだ人々の形質を代表させることは無理がある。所属年代についても，さらに多様な段階例が欲しい。今後，半島全域にわたる古人骨情報や，半島の背後に広がる中国大陸などの古人骨データが積み上げられ，一層詳しい分析が可能となることを期待したい。

参考文献

1) Yamaguchi, B.: A review of the osteological characteristics of the jomon population in prehistoric Japan. J. Anthrop. Soc. Nippon, 90, 77-90, 1982
2) 小片　保：縄文人の形質序説－主として形質の推移について－．どるめん，創刊号，22-33，1973
3) 池田次郎：海と山の縄文人－形態の地域差と時代差－；日本史の黎明（八幡一郎先生頌寿記念考古学論集），初版，八幡一郎先生頌寿記念考古学論集編委員会編，29-56，六興出版，東京，1985
4) 峰　和治：朝鮮半島の古人骨と渡来人問題．文明のクロスワード Museum Kyushu，49，30-37，1995
5) 島　五郎：現代朝鮮人下顎骨計測．人類誌，47，1-22，1932
6) 島　五郎：現代朝鮮人体質人類学補遺 頭蓋骨の部．人類誌，49，245-267，1934
7) 大西雅郎：蒙古人，支那人及び朝鮮人頭蓋諸骨の人類学的研究 第1部.人類学叢刊（甲）人類学，3，1-102，日本人類学会，東京，1941
8) Uweda, T.: Physisch-anthropologische Untersuchungen über den Schädel der ostasiatischen Völker. The Keijo Journal of Medicine, 2, 119-164, 1931
9) Takenaka, M.: Morphological traits of crania in modern Kyongsang nam-do Koreans. Acta Anat. Nippon. 69, 645-660, 1994
10) 小浜基次：朝鮮人の生体計測．人類学・先史学講座，4，1-34，雄山閣，東京，1938
11) 金関丈夫：人種の問題．日本考古学講座，4，238-252，河出書房，東京，1955
12) 中橋孝博，永井昌文：福岡県志摩町新町遺跡出土の縄文・弥生移行期の人骨．新町遺跡，志摩町文化財調査報告書，7，87-105，志摩町教育委員会，1987
13) 山口　敏：日本人の生成と時代的な推移；人類学－その多様な発展，日本人類学会編，60-71，日経サイエンス，東京，1984